

織りみちこ

大島 美千子



「自宅に何うと、整った部屋の片隅に織機が一台置かれていた。廻りの壁には制作された織物たち、仕立てられた洋服が行儀よく並んでいる。『みちこ』の子供たちである。その織物は製作者本人をあらわすかのように、自由で明るい、そしてきりっとしまっている。話を伺うと、織物という私の概念をぶち破るようなものが次々と出てくる。和紙を細く裂いて織り込んだもの、白樺の小枝、スリランカの細長い木の実、果ては針金さえも糸の代わりを務めている。メキシコのマテ紙（絵の描いてあるもの）を細く切って、それを織り込み、糸の中に絵があるようなタペストリー、それと同じ手法で、書や絵も独特の風合いを持った作品に仕上げている。そして自分で織った布を仕立てて洋服や、敷物を作る。最近では古布を使った洋服やスカーフを作ることにも面白く楽しんでしようがないという。

お話を聞くと、機織に出逢ったのは五年前だという。仕事をしていた時、六十歳の定年まで勤めて、その後自分のやりたいことを探すのでは遅すぎるのではないかと、もうエネルギーが残っていないのではないかと考えていた。五十二歳になった時、何がやりたかったわけでもないのに、ここまで勤めれば後なんか生きていくだけのものができた。と勤めを辞めてしまった。辞めてしまってから、サ！何をしたらいいのか悩んだと言う。そんな時、たまたま瀬戸の末広通り商店街にあるN

PO法人、瀬戸地域福祉を考える会（主に高齢者のためのもの）で機織教室「まごころ」があり、受講者を受け付けていることを知る。さっそく申し込み、機織を教えてもらう。週一回の受講日待ち遠しくて仕方がない。織っている内時間も忘れて集中していたと言っ



機織中です

以下大島美千子さんのお話です。

思えば私が小さいころ、母親が夜なべをして子供たちの服を作ってくれました。その母は今でもパッチワークや洋服の仕立てをやっています。毎月、実家に行くたびに新しい作品ができています。両親は戦後、知多で「ぼんせんべい（ぶがしのようなせんべい）」を焼き、三人の子供を育て、約五十年間家業を続けました。家業をやめた二年後、父親が亡くなる時、七十五歳で改めて洋裁を習い、趣味で始めた社交ダンスのドレスや、身に着けるもの

は下着からお出かけ着まで作っています。パッチワークは近所の人から謝礼をもらって教えるほどになりました。そんな母親の血が私に流れているのを強く感じます。

母親の生きてきた道は、私などよりはるかに苦勞が多く、波乱に富んでいます。

せんべいを焼きながらそれでも洋裁を続けてきた根性に頭が下がります。そして、私は親子展などでそんな母の力をいまだ借りているのです。

機織を始めて三ヶ月ほどたったとき、カンボジアや、パキスタン、中国へ旅行する機会がありました。そのとき猛烈に「ああ機織がしたい」帰国後、すぐに機織を買ったのです。そして機織三昧の日が続き、沢山の作品が貯まっています。友達にプレゼント攻撃していました。まだ未熟な、私の作品を瀬戸市の古民家、久米邸の中にある和紙の店「ぼだいじゅ」の近藤さんが素敵だからと言って、店に置いてくださるようになりました。しばらくすると、当時の古民家久米邸の代表の方が「ここで作品展をやったら」と言ってくれました。「まだ未熟だし、もう少しやってから」と言う、「じゃー後どのくらいやったらいいの」とおっしゃる。後何年やればできるかと言われると、答えることができない。その時、あの母の作品と一緒にならばなんとか見てもらえるものになるかもしれない…。

怖いもの知らずにやることに決めてしまいました。それが二〇〇五年十一月の第一回親子展でした。そして瀬戸の「蔵遊前」で第二回、第三回と続くことになり、母も「よしばあ、の縫い遊び」として活動することになりました。



裂いた和紙



和紙を織り込んだ布

私もいろんな所へ作品を持って出掛けようになりました。そうすると、私のところに糸や古布が集まってくるようになったのです。

それらをなんとか活かしたい。せっかく私の所に縁あって来てくれたのに、私がいい加減に使っては申し訳ないという気持ちになります。古布は裂いて、(裂織り)にします。年期的に入った布は得もいわれぬ味わいをお出ししてくれます。

様々な人や糸、布との出会いによって作品が出来上がってきます。そして、機織は自分の天職だーい！と思うようになってきました。先日、日本中に増えて困っている竹をなんとか利用したいと取り組んでいる八十一歳の方から、竹の繊維を使って、織製品が出来ないかと相談を受けました。今は竹の繊維を使った織物を試作しています。面白そうなので…できるかどうか分からないのに、新しいものに対する好奇心に動かされ引き受けてしまいました。

まだまだ未熟な私なのに、私の作品を欲しいと言ってくくださる方や、糸や古布を提供してくくださる方など、織りや糸・布を通じて様々な出会いがあり、その輪が広がっていきます。こんな出会いを、人のつながりの輪(和)を大事にしていきたいと思っています。

美夜之窟さんとの出会いも、蔵遊前さんの織がご縁でした。これからも未永いお付き合いをよろしくお願い致します。

<http://www5.plala.or.jp/michicoco/>

取材 八木三生